



特定非営利活動法人 NINJIN

Working Together for Asian Community Development

104-0043 東京都中央区湊 2-16-25-202
Tel/Fax:03-3553-7056 info@ninjin-npo.org

Vol.14
2011.10.27

モンゴルに車イスを届けました

2011年8月12日(金)～19日(金)

今年の「第7回ニンジン・モンゴルツアー～モンゴルの障がい児に車イスを届ける旅～」は、成田空港から12人で21台の車イス、下肢装具類などを運びました。

車イスのうち18台は、「障がい児親の協会(APDC)」に、その他は、南ゴビの「シェアザジョイセンター」、ウランバートル市チンゲルティ区の障がい児センター(CBRC)、および国立身体障害者リハビリテーションセンターに各1台寄贈しました。



車いすを調整する大塚さん

下肢装具類は親の協会に置いて、協力隊員の方たちと連携して活用いただくことにしました。

車イスの贈呈式

16日に「障がい児親の協会(APDC)」で車イスの贈呈式をしました。今年も、協会の事務所がある国立盲学校の中庭で車イスの適合をみてお子さん身体に調整して渡す作業を行いました。ここで、車イスをお渡しできたのは、2歳から14歳までの11人(うち1人はチンゲルティの障がい児センターから)のお子さんでした。



車いすののってごきげんです

今年も理学療法士の吉濱理事を中心に、お子さんに合いそうな

車イスを選び、義肢装具士の大塚副理事長、千葉県東金市から参加された西さんが車イスの調整に活躍されました。他の参加者もそれぞれできることで力を合わせました。



装具を着けたら立えました

事務所の中では、脳性マヒの専門医の中島雅之輔先生(東京都北療育センター)が診察をしてくださいました。事前に診察の希望を受け付けていたのは5組でしたが、車イスを受け取りに来た親子も希望される方が多く、10組以上になりました。

診察が終わったところで、代表のセレンゲさんからお話を伺い、その後、かわいいお花のついた手づくりのお礼状をスタッフのお嬢さんのザヤさんから一人ひとりに手渡され、一同感激して涙する一幕もありました。

今回も、青年海外協力隊やシニアボランティア、協力隊OGなどの現地にいる日本人やモンゴル人のボランティアの皆さんのご協力で、スムーズに終了することができました。



お手伝いいただいた皆様も一緒に全員で記念撮影しました

ツアーの一行は、車イスを届けたり視察などの他、南ゴビや ウランバートル近郊の景勝地テレルジで大自然を満喫しました。南ゴビでは、現役の協力隊員が2人、OBが1人合流して15人となり、にぎやかなツアーとなりました。

東日本大震災被災者支援

できることから

モンゴルからのお見舞い

3月11日に起きた東日本大震災の直後から、モンゴルでこれまでつながっている、南ゴビのシェアザジョイセンターのバドマー所長や、ウランバートルの第10治療保育幼稚園のプヤンジャガル園長、そして革製品のモントゥルガ社のガンバット社長などから次々と安否確認とお見舞いのメールが入ってきました。

その中でも、長年のおつきあいのあるモントゥルガ社からは、被災者が寒さを防ぐためのラクダの毛布やソックスを支援物資として送りたいと連絡が入りました。同社は革製品や建築資材などを作っている会社で、ガンバット社長は障害者団体への支援や、障害者雇用を進めています。

結局、毛布は政府間のやり取りもあつたようで届きませんでした。ラクダのソックス100足と社員の方々から自分たち

にできる支援として、革の小物類を寄付したいと航空小包が1箱送られて来ました。

開けてみると、

ソックス100足と、

なんとニンジンのマークがついたペンケース、札入れ、フェルトのコースターが各100点ずつ入っていました。社員の皆さんが急遽作ってくださったことがわかり、感激しました。ソックスはすぐに石巻の避難所の方々に送りました。

ニンジンとしてできることを

モンゴルからの応援に応えるべく、このペンケース、札入れ、コースターをもとにして、被災者支援活動をしようと、この3点を「モンゴルからの友情セット」として支援のための寄付を集めることになりました。

避難所に車イスを提供

東日本大震災に関して、どう動けるか考えているところに、JICAの協力隊事務局より車イスの要請が届きました。帰国中の隊員が支援に入っている避難所で車イスを必要としているとのことでした。

4月1日に、心身障害児総合医療療育センターで、センターからも新品2台の提供をいただき、合計6台をお渡ししました。4月2日に2台は避難所になっている宮城県の東松島市立矢本第一中学校に届けられました。



送り出した6台の大人用車イス

残り4台は仙台にあるJICA東北支部に保管されていましたが、5月31日に日本障害フォーラム(JDF)東日本大震災被災障害者総合支援本部・みやぎ支援センターに引渡されました。

石巻に車イスを送りました

いつもはモンゴルの子どもたちのために車イスを集めているのですが、被災地から車イスの要請が伝えられたため、大人用の一般的な車イスも集めて送っています。

2回目は5月31日の夜、知人のトラックに7台を積んでいただき、翌朝、石巻に到着しました。石巻では、明るい社会づくり運動石巻地区推進協議会(会長：斉藤正美さん)のご協力をいただき、津波で流されて新しい場所に施設を建築中の「めだかグループ」にすぐに届けられました。

「めだかグループ」は、宮城県石巻市で小規模多機能型居宅介護(めだかの楽園)、通所介護(めだかの楽校)、訪問介護などの介護サービスを行っています。施設のあった南浜町は津波で本当に何もなくなりましたが、被災時にいた47名のお年寄り、被災の2日前にたまたま避難訓練を行ってい



建築中の新施設の玄関で、利用者、スタッフと石巻明社斉藤会長(右端)

たことが功を奏し、一人の犠牲者も出さず無事避難できたそうです。さっそく、寄贈式の画像を送ってくださいました。

盛りだくさんな七夕コンサート

震災復興支援募金も

7月2日(土)には、「七夕チャリティコンサート・モンゴルの風」を開催しました。会場のルーテル市ヶ谷センターには175人のご来場をいただき、会場をほぼ埋めることができました。ご来場くださいました皆様、本当にありがとうございました。

このコンサートも回を重ね、スタッフの動きも手際よくできるようになってきました。



開始前の受付風景

今回は予定していた馬頭琴のバト

オチルさん、バトエルデネさん、歌と琴のハンダーさん、友情出演のゴスペル東京の皆さんの他に、ピアノのゲレルさん、踊りのジャブハーさんも加わり、

2本の馬頭琴とピアノという組み合わせも聴くことができました。

今年は東日本大震災後、多くのモンゴル人が帰国してしまい、出演者がなかなか確定できずにいました。それではとゴスペル東京の有志の皆さんが応援に来てくださる

ことになりました。第2部のオープニングに、指揮の淡野保昌さんとメンバーあわせて25人も駆けつけてくださいました。



お茶碗の踊り



ゴスペル東京の皆さんの力強い歌声がホールに響き渡りました

震災復興支援募金を呼びかけ

コンサートの合い間には、ニンジンの活動紹介やモンゴルから帰国した協力隊員・多田羅千恵さんが現地の障がい児について報告しました。それと共にモンゴルから被災者支援にと送られて来ていた革製品をご紹介します。震災復興支援募金を呼びかけました。多額の募金をしてくださった方には、この「モンゴルからの友情セット」をお礼にお渡ししました。当日の募金額は、127,527円にもなりました。ニンジンとして被災地へ車イスを提供する他、障がいのある方を中心に支援を行っていく予定です。ご協力ありがとうございました。

北タイ・ルデラ交流ツアー

2011年2月5日(土)～11日(金)

ルデラ設立20周年にあたって

北タイをベースにして、アジアの少数民族ラフ族の人びとを主として支援してきたNGOルデラ(Rural Development of LAHU)が20周年を迎えました。リーダーであるダイエー・セイリさんは、日本に勉強に来たこと



のどかなホイナムクン村

をきっかけに日本各地の人びとと絆を結び、さまざまな活動を展開してきました。2月に記念の集いが計画され、私たちも駆けつけお祝いをし、さらなる交流を展開していこうとツアーを実施しました。

山の村へ

一行14人は、6日朝チェンマイ郊外で象のトレッ

キングを体験後、トラック2台に乗り込み、ルデラが運営するメタム子ども寮に寄ってから、ダイエーさんの村・ホイナムク



焼畑で丸坊主になった山々

ン村に上りました。途中見た山々はあちこちが無残に荒れ、焼いた直後の黒々したところも見受けられました。村に到着するとすぐ小さい子どもたちがやってきて、遊ぼうと学生たちの手を引っ張っていきます。夜はダイエーさんの話を聞きました。

7日は朝食前に、持参した古着のバザーを開きました。Tシャツから、ジャケット、子供服など5円から60円位の値段で、あっという間に完売しました。売上げは約2800円になり、子ども寮の食費の足しにと寄付しました。



朝早くからのバザーにこの賑わい

この後、陸稲のおいしい朝ご飯をいただき、ダイエーさんの案内で教会やお茶工場、山の中のお茶やコーヒーの木の栽培を見学しました。村は標高1500メートル近くあり、果樹やコーヒーには適しています。ルデラでは、こうした特長を活か

して有機農業を推し進めようとしています。

夜はまた学習会をしました。ツアー参加者で、かつてダイエーさんを受け入れた千葉県東金市の山武ボランティア協会代表の西芳秀さん、そしてルデラの新プロジェクト、RTF(リターン・トゥー・フォレスト)について、スポンサーである浦和北ロータリークラブ環境保全委員長の古澤建治さんからお話を伺いました。

山を緑に&農民の生活向上プロジェクト

このRTFプロジェクトは、焼畑で荒れた山に植林して緑の森を取り戻し、その作業をする農家には豚を配り1年間は生活支援もするというものです。5年間で25軒の農家とこのプロジェクトを行い、8ヘクタールに8000本の木を300万円で植えようという計画しています。このプロジェクトを実際に進めるルデラへの指導とコーディネート役をニンジンの小松光一理事がしています。

森を復活しつつ、養豚をして堆肥をつくり循環型農業ができるよう生活支援するという画期的な事業です。やる気のある人から手を上げて取り組むことで、山の村の農業が変わっていくことになります。これから山で採れるコーヒー豆を独自のブランドで売れないかと模索が始まっています。

ルデラ 20周年感謝祭

8日朝山の村から下りて研修農場に移動、「ルデラ20周年を祝う正月祭」に参加しました。村々からは、トラックの荷台に民族衣装をまとい、楽器を抱えた人びとが次々と到着し踊りが始まりました。その数、ざっと400人あまりでしょうか。



正月のお祝いの踊りに参加

記念式典では、お祈りの後、牧師さん、地元の区長さん、チェンライのロータリークラブなど来賓の方々、そして日本人たちからの挨拶と続

きました。メンバーのなかから、宮城県角田市のアジアの農民と手をつなぐ会、山武ボランティア協会、大地を守る会、そしてニンジンも挨拶しました。浦和北ロータリークラブは、この場でRTF事業の1年目の支援農家5人とルデラに対し、1年目の資金を手渡しました。



左から3人目がダイエーさん

このあと一行は、タイ北端の町・メーサイから歩いて国境を越え、少しだけミャンマーを体験し、ゴールデン・トライアングルを周遊して帰国しました。

映像記録ができました

今回は「アボン 小さい家」の映画監督、今泉光司さんもフィリピンから参加してビデオ撮影をされ、「森の音が聞こえる」というタイトルのドキュメンタリーにまとめてくださいました。監督の帰国時に上映会を企画する予定です。

久しぶりのニュースレターで、主な事業のみのご報告になりました。ブログもご覧いただければ幸いです。 <http://blog.canpan.info/ninjin-jpn/>